

二〇一八年度 入学試験問題

法学部A方式I日程・文学部A方式II日程・経営学部A方式II日程

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

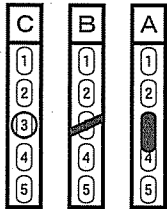
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章は、思想家ハンナ・アレントの著述について論じたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

* アレントは『全体主義の起原』において、現代の大衆社会では人間が孤立し、他者とともに共有する「世界」を喪失していることを確認していた。全体主義の支配は、こうした大衆社会において孤立した人間を組織する運動として貫徹されたのだった。アレントはすでに大衆社会の特徴を二つあげていた。公的な領域に参加しないことと、政治的に無関心で中立なことである。しかしこれはどちらも現代の社会の人々が「世界喪失」の状態に陥っていることを、裏側から語ったものにほかならない。

ギリシアのポリスで生まれた共和主義的な伝統のもとで育まれた民主主義の政治思想では、市民社会の一員である市民は、自分たちが生きる場である社会をどう導くかに重要な関心を持ち、「公民」としてその活動に参加することが前提とされていた。^①現代の民主主義はどれも代表制の民主主義であり、民衆から選ばれた代表が議会において、その国家の方針を決定するとされているが、この代表はあくまでも市民から選ばれた代表であり、公開の場で、真剣な討論によって、市民の意志を代表するものとみなされている。

A * カール・シュミットが『現代議会主義の精神的地位』で鋭く指摘したように、現代においては実際には、「政党ないし政党連合の小委員会またはごく少数の人数の委員会が、閉ざされた扉の背後で決定を行っている」ことは周知の事実である。現代の日本でも、憲法と安全保障を含む重要な事柄が、国民の代表である議員たちが議会という場だがいに異なる意見を提起し、議論することで決定されるのではなく、与党の政治家たちの公開されない場での話し合いで決定されていることもまた、周知の事実だろう。

B シュミットが指摘するように、こうした政治家の決定の背後で、資本主義の論理が貫徹されていることも、忘れてはならない。「大資本家的な利益団体の代表者たちがごく小範囲の委員会を取り決めていることのほうが、幾百万の人間の日常生活と運命にとつては、おそらくこうした政治的な諸決定よりも重要なのである」と言わざるをえないのである。

そしてこのように「公開性と討論とが議会運営の事実上の現実において空虚で、取るに足らぬ形式と化してしまっている」と

すれば、一九世紀において發達した議會もまた、その従来の基礎とその意味を失つてしまつてゐることは、否定できない。シユミットがここで分析しているのは、一九二〇年代のワイマル共和国の状況であるが、これは現代の日本の状況にもほばあてはまる。ワイマル共和国では一九三〇年代にヒトラーの率いるナチスが、この状況を改革することを訴えて、ポピュリズム的な方法で国民の支持を獲得したのだった。大衆社会のうちで「世界」を喪失し、孤立した大衆は、ワイマル共和国の議會においてはみずからの意見が代表されず、しかも公的な活動に参加する意志もなかつたために、全体主義が自分たちの利益を実現してくれるものとして期待し、全体主義の運動に荷担していったのだった。

しかしアレントは、この大衆社会のあり方が消費社会の到来と同じ時期に生まれたことを指摘していた。全体主義が支配したのは、たんに議會制民主主義の無力によるものだけでなく、わたしたちが何かをみずからの手で作らだすことよりも、商品として提供されるものを消費することに喜びをみいだすようになってゐることに、大きく影響されていると考へたのである。近代の社会は、労働する社会であり、消費する社会である。労働も消費も古代から營々とつづけられてきた營みであるが、それがどうして近代にいたつて、政治的な過程にまで影響するようになったのだろうか。

この問題を考察したのが、一九五一年に刊行された『全体主義の起原』に次いで、一九五八年に刊行された『人間の条件』である。アレントは第二の主著とも言うべきこの書物で、主として古代ギリシアのポリスのあり方と現代の社会のあり方を対比しながら、現代の大衆のあり方を描きだしていく。

古代ギリシアのポリス、とくにアテナイでは、公的な活動に参加できるのは自由民だけであり、自由民であるのは、両親がアテナイの市民である家族から生まれた成人の男子の市民に限られた。古代ギリシアでは自由の概念は現代とは違つて、身分と密接に結びついていた。このアテナイの市民は、それぞれに家庭をもち、その家庭の主人として、家族の妻、未成年の男女の子供たち、召使、奴隸たちを支配していた。この家庭の役割は、主人とその家族の人々が生活し、生命を維持することにあつた。

こうした市民の家庭の内部では、自由という概念は適用されなかつた。家族もその他の成員も、主人である男性に服従することが求められた。この家庭という領域は、労働と消費の營みが行われる私的な領域なのである。家庭や家族では、「家長が

絶対的な専制的権力によって支配する」のであり、この領域では言葉による説得ではなく、暴力と命令が行使されるのである。これにたいしてポリスは、家庭という私的な領域から、人々の間で公共的な領域を作りだすために登場してきた市民たちが、暴力や命令ではなく、たがいに他者を説得することを目的とした政治的な空間である。「政治的であるということは、ポリスで生活するということであり、ポリスで生活するということは、すべてが力と暴力によらず、言葉と説得によって決定される」という意味であった」のである。

アレントは古代ギリシアのポリスという政治的な空間を实例として示しながら、人間の活動性には三種^{*}種類の活動と、それが展開される領域があることを示した。しかしこの領域は、古代のギリシアだけに存在するものではない。わたしたちが言論と活動によって人々の目の前に登場するとき、つねに「現われの空間」が生まれるのであり、公的な領域が作りだされているのである。たとえば、個人的な問題ではなく、人々に共通する問題を話し合うために集会が開かれたとしよう。その公的な集会において、あなたが拳手して発言したとしよう。そのときにあなたは議論されている問題にたいして自分の意見を述べることになるだろう。ここで何が起きているのだろうか。まずあなたは公的な問題について関心をもっていて発言する意思があることをその拳手で示したということである。次にあなたは自分の発言によって、その集会における議論に影響を与えようとしていることになる。もちろん自分の見業のために発言する人もいるだろうが、それでもその意見は議論に影響するのである。こうした発言は、他者を言葉によって説得することを目指している。

そしてあなたはこのように発言することによって、他者の批判をうける用意があることを示したことになる。発言するという行為は、他者を説得しようという試みであると同時に、その人がどのような人であるかを暴露する。その人は発言することで、「暴露の危険をみずから進んでおかしている」のである。発言するということは、そのようにその人の人格とアイデンティティを作りだすと同時に、それを他者の面前にさらけだす行為である。発言はみずから危険をおかすことであり、その危険を引きうけようとする勇氣を示すことである。

またこのように発言することは、他者から反論されることを引きうけることである。他者を説得するという行為は、ほぼ確実に他者からの反論をうけ、批判されるということを想定している。それはみずからへの攻撃を招く危険性を引きうけること

である。そして他者を説得するためには、他者からの反論に対処し、その反論に反論をするか、新たな議論の地平を示すことによつて、その反論をうけいれながらも、それを乗り越える姿勢を示す必要がある。発言するということは、みずから露呈する勇気を示すことで、他者との間に関係を構築することを引きうけるということである。

④ そのためには、集會に参加している他の人々が、自分と平等で自由な人々であるということ、そして意見は多様なものであるということとを前提としなければならない。こうした発言は、「人間の多数性」を前提とするものであり、しかもそれぞれの個人が自分に独自の意見を、他者と異なる意見をもつユニークな存在であることを明らかにするのである。「言論と活動は」、「それを行う者の」ユニークな差異性を明らかにする。そして人間は言論と活動を通じて、たんにたがいに異なるものであるという次元を超えて抜きんでようとする。つまり言論と活動は、人間が物理的な対象としてではなく、人間として相互に現われる様式である」。

この「現われの空間」は、公的な領域において人々の注目を集め、スポットライトを浴びるという「明るさ」のうちで初めて可能になる。「この明るさは公的な領域だけに存在する」のである。閉ざされた部屋での密議ではなく、人々の集まりにおいて発言することで、あなたはこの明るさのもとに立つ。そして発言とそれへの反論とさらにその反論への反論を通じて、あなたはそのに出席する人々の間に一つの関係の網の目を作りだす。この関係の網の目は、「わたしたちが共通して目に見えている物の世界と同じリアリティをもっている」のである。あなたは「現われの空間」としての集會において発言することで、このようなさまざまなことを実現するのであり、そこにはつねに公的な領域が生まれるのである。

こうした公的な領域は、現代でもつねに存在しているのであり、こうした領域に登場することによつて、わたしたちはつねにある公的な役割をはたす可能性を与えられているのである。一九三〇年代のドイツで失われていたのは、まさにこのような公的な領域だった。⑤ 人々が大衆としてではなく、市民として発言するための場が失われていたのである。アレントが古代ギリシアのポリスを例にあげてこうした公的な領域と活動の意味を示したことの背景には、そうした現代的な差し迫った動機が控えていたのである。

(中山元『アレント入門』より。文章を一部改変した)

【注】

*アレント

ドイツ出身の哲学者（一九〇六—一九七五）。なお、文中における出典表示のない「」内の文言は、その著書『人間の条件』（原著一九五八年刊。清水逸雄訳）からの引用である。

*カール・シュミット

ドイツの法哲学、政治哲学者（一八八八—一九八五）。

*三種類の活動

アレントは人間の活動を、生存のための「労働」、物事を作り出す「仕事」、人と対話し交流する「活動」の三つに分類した。

問一 傍線部①「現代の民主主義」について述べたものとして誤っているものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ここで論じている「現代」には、一九二〇年代以降、今日に至るまでの時期が含まれている。

イ 市民から選ばれた代表が政治を担うという形式が、民主主義の形骸化を招く要因となっている。

ウ 国民の代表が議論して決めるはずの物事が、現実には政権側の一部の政治家によって決定されている。

エ 資本主義の論理に貫かれた経済団体の代表が、国民の代表である議員から政治権力を奪取しつつある。

オ 市民の代表が、議会という公開の場において討論によって国家の方針を決定する形式を取っている。

問二 空欄

A

B

に入る語の組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア A そもそも B また
イ A だが B なぜなら
ウ A すなわち B そのうえ
エ A とはいえ B したがって
オ A しかし B さらに

問三 傍線部②「近代にいたって、政治的な過程にまで影響するようになった」について、本文から推測できる説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 大衆が労働よりも消費を好むようになった一方で、それらの行為にかかわりの薄い政治に対する関心が忘れられがちになって全体主義を招来した。

イ 社会の中で労働と消費の重要性が高まり、政治では解決できない多くの問題が生じたことによって、大衆の間で全体主義への期待が高まった。

ウ 労働や消費の意義が大衆に広く認識されたことによって、社会や政治の場において大きな発言力をもつようになった労働者や消費者が全体主義に荷担した。

エ 労働や消費はもともと政治とは無縁の私的な領域で行われたものであり、それに慣れきった大衆が政治参加を求めることなく全体主義を支持した。

オ 労働と消費が肥大化して大量消費社会となったことによって、大衆が生産と消費にもっとも効率がよいとみなされていた全体主義を歓迎した。

問四 傍線部③「ここで何が起きているのだろうか」について、その説明にあてはまらないものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 発言者は、他者から批判を受ける覚悟があることを表したことになる。
- イ 発言者は、自らがどのような存在であるのかを他人にさらけ出している。
- ウ 発言者は、議論を通じて他者と関係を築こうとしていることを示している。
- エ 発言者は、議論されている内容に対して懐疑的でないことを表明している。
- オ 発言者は、議論に参加する意思があるということを示している。

問五 傍線部④「そのためには、集会に参加している他の人々が、自分と平等で自由な人々であるということ、そして意見は多様なものであるということを前提としなければならぬ」とあるが、それはなぜか。その説明として適切なものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 自由と平等は民主主義の基本原則であり、それを守るためには多様性が尊重されるべきだから。
- イ 参加している人々のもつ意見が多様なものでなければ、もともと議論する必要があるが生じないから。
- ウ 参加者がたがいに批判し、反論しあうには、気兼ねのない関係にあることが条件となるから。
- エ 相手が自分と対等な立場にある自由な人々でなければ、関係を構築する意義が薄いから。
- オ 個人のもつ独自の意見を相互に尊重するためには、その相違を認めあわなければならないから。

問六 傍線部⑤「人々が大衆としてではなく、市民として発言するための場が失われていた」について、「大衆」「市民」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 「大衆」は議論に参加する意思のない人々を指すのに対して、「市民」は意思をもって議論に加わる人々を指す。

イ 「大衆」は議論に参加する権利をもたない人々を指すのに対して、「市民」はそれをもつ人々を指す。

ウ 「大衆」は現実の人々を指すのに対して、「市民」は理想化された民主主義の担い手を指す。

エ 「大衆」は議論に対して中立な人々を指すのに対して、「市民」とは特定の方向に議論を誘導しようとする人々を指す。

オ 「大衆」はその意見が議論に反映されない人々を指すのに対して、「市民」は議論を牽引する選ばれた人々を指す。

問七 本文で論じられている「公的な領域」が成立するための要件を、三十五字以上、四十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

エドゥアール・マネの絵を見たことがあるだろうか。おそらく、誰の作品か知らなかったとしても、教科書やポスターで《笛を吹く少年》(一八六六)という絵を目にしたことはあるだろう。鼓笛隊の少年が、横笛を吹いている絵である。わたしたちはこの絵を見ても何の違和感も感じないだろうが、これが描かれた当時の人々はこの作品を見て戸惑いを覚えた。

「近代絵画」はエドゥアール・マネとともに始まったと言われる。これはすでに定説として落ち着いている。

マネが何を变えたのかを確かめるために、まずは、マネより前の絵画がどのようなものであったかを確認しておこう。マネ以前の西洋絵画の特徴をその後の絵画と比較してみると、二つの大きな特徴を見ることが出来る。ひとつめは、その外部に参照項を持つということ。ふたつめは、絵画が独自の表象空間だということ。

ひとつめの特徴は、何がそこに描かれているかにかかわっている。マネ以前の西洋絵画は、主に神話や聖書の物語、あるいは歴史的出来事を主題として描かれてきた。大きく分けて「歴史画」と分類される絵画である。ということは、絵より先に何らかの物語があり、絵画はその物語を描いたということだ。ガエタン・ピコンによると、過去の画家たちは、「集団的な記憶や夢想到に属していたもの」いろいろな伝説と神話、歴史の偉大な行為と人物、美の理想的な造形、欲望の理想的な対象(「近代絵画の誕生」、鈴木祥史訳)を描いてきた。そのような絵画は、理想の世界を出現させる役割を担っていた。それはあくまでも理想の世界なので、わたしたちが生きる日常の世界とは切り離された、非現実的な光景である。

また、ピコンは次のように述べる。「十九世紀前半でも、あいかわらず伝統にもとづいた非現実的な絵がフランスの絵画を支配していた。ダヴィッドは神話の代わりに歴史をおきかえた。というよりも、むしろ歴史に神話的なひろがりにあたえたのである」(同書)。ダヴィッドの《ナポレオンの戴冠式》は新しい国家の創設を記念し表象していたが、そこに描かれたのは神話に置き換わる「歴史Ⅱ物語」だった。ついでに述べておくなら、ふつうの人々が絵画に現れるのも、ほとんどが「歴史Ⅱ物語」の場面を利用してだった。聖書の一場面のかなかに群衆として、あるいはイタリア都市国家の共和政の寓意的イメージとして、そ

して、国民国家を支える「国民」として、人々は絵画に登場していたのだ。

マネ以前の絵画のふたつの特徴は、絵画が表象の空間だということだ。絵画を見る人たちはそれが「描かれたもの」であることを特には意識しなかった。十五世紀以来、西洋絵画では、壁やキャンバスなどの「空間上に絵画が置かれ、あるいは描き込まれているもの」という事実を忘れさせ、おおい隠し、巧みにかわすように努めるのが伝統^アだった。「つまり、程度の差はあれ長方形で二次元のこの表面に絵画がイキヨ^アしているということを忘れさせ、その絵画が置かれている物質的空間を表象された空間へと置きかえ、その表象された空間が、画家の描いている空間それ自体を、言ってみれば否定していた」(ミシエル・フーコー『マネの絵画』、阿部崇訳)。

描かれている光景が非現実的なものであるにもかかわらず、それは三次元の空間に見えるように表現される。そのことによって、その場面は現実感を持って現れてくる。それが混ぜ合わせた絵の具の重なりとして見えることは決してなく、つねに何かを表現したイメージとして見える。壁に描かれた絵画は、そこが壁であることを忘れさせるし、そこにあるものがただの絵の具の塊であることも忘れさせる。わたしたちが見るのは、壁でもなく絵の具でもなく、そこに描かれた「絵画」である。このように壁や絵の具などをボウキヤク^イさせることこそが絵画にとつての成功として考えられていた。そして、マネ以前の絵画にとつては、どのようにしてそのイリュージョン化を成功させるかということが重要だったのである。

だが、マネはこうした西洋絵画の伝統をクツガエ^ウした。マネは、神話や聖書や歴史の物語を参照する絵画であること、そして、表象の空間であることという、この二つの約束事を破ったのだ。

マネの絵画には神話や歴史にもとづいた主題があるわけではない。それはむしろ主題に対して無関心であるとも言える。バタイユは「マネが情熱のレベルにまでもち来たらした彼の描く欲^ウびは、ラファエロやティツィアーノが満足していた神話的世界に彼を対立させる、あの神聖な無関心と混り合ったのである」と言い、「主題に対する無関心は単にマネの特性にとどまらず、また印象主義全体のそれ、そしてわずかの名を例外とすれば、近代絵画のそれである」(『沈黙の絵画——マネ論』、宮川淳訳)と述べた。

近代絵画で描かれるもの。それは、絵を描くための口実にすぎない。例えば、《笛を吹く少年》(一八六六)や《バルコニー》(一八六八—六九)には特にストーリーがあるわけではない。さらに、《草上の昼食》(一八六三)や《オランピア》(一八六三)は、過去の絵画を利用して描いているが、この事實は、むしろマネの作品の「無関心」性をますます強調することになる。マネが過去の絵画を真似するとき、そこにあった物語が抜き取られてしまうからだ。例えば、ベッドに横たわる女性を描いた《オランピア》は、ジョルジョーネの《眠れるヴィーナス》(一五〇一—一〇)やティツィアーノの《ウルビーノのヴィーナス》(一五三八)のヴィーナスたちと同じポーズをとっている。マネは、ヴィーナスのポーズで横たわる娼婦を描いたのだ。だが、ポーズは同じでも、マネが描いたのはひとりの生身の女性であり、「美」の象徴ではない。マネは神話に源泉を持つ「美」の象徴を抜き取って、ふつうの生々しい人間を描いたのだ。

もうひとつ別の例を見てみよう。当初は《水浴》というタイトルだった《草上の昼食》は、十九世紀中頃に都市の中産階級のあいだに広まった河畔の水浴の光景を描いている。この絵の中央に置かれた三人は、マルカントニオ・ライモンディの《ラファエロのパリスの審判による銅版画》(一五二五頃)の右下に描かれた三人の人物と同じポーズをとっている。また、ティツィアーノ(あるいはジョルジョーネ)の《田園の奏楽》(一五〇一—二)の構図とも類似している。《田園の奏楽》はウエルギリウスの詩『牧歌』をもとにして描かれた詩の寓意図^④と言われ、二人の着衣の詩人と二人の裸体のニンフが描かれている。二人の着衣の男性とともに座る裸の女性と、水を汲む裸の女性という構成が《草上の昼食》とまったく同じである。マネは《草上の昼食》を描くにあたって、こうした過去の作品の構図やポーズを参照した。しかし、絵画全体から一部の構図やポーズを抜き出すことによって、もとの絵画に込められていた意味を消し去っている。何らかの物語を持つ絵画から抜き取った些細な一部は、明らかに何の意味も持たないからだ。ラファエロやティツィアーノの構図やポーズを利用していることによって、逆に、過去の絵画との違いがはつきりとしてくる。マネの絵画は、絵画の外にある物語をシサ^エするのではない。それは、その絵画の内側で起こる出来事としてのみ存在している。

マネの絵画は、外部の参照項との関係を断ち切った。こうして、絵画は自立性を獲得する。つまり、絵画は「描くこと」それ

自体になつたのだ。このため、マネの絵画に「描かれているものは、表現されたものを指向しているのではなく、（その全体において、またはその一部分において）表現するという行為を指向しているのである」。そこには痕跡、すなわち「人間の行為と構成されようとしていた自然との間に生じた出会いの線、手と眼との間に生じた出会いの線」（ピコン前掲書）が描かれる。それまでの絵画では、そこに描かれたものしか、つまり「絵画」という「結果」しか見えていなかったものであり、だからこそイリュージョン化に成功していた。

それに対して、マネは、筆致を、つまり描くプロセスそのものを絵画に残した。このことは、絵画の物質性を明らかにする。つまり、それがキャンバスや絵の具であるということ、そしてそれが描かれた「絵画」であるという事実を露わにするのだ。これを^⑤「絵画の痕跡性と呼ぶことができる。絵画の主題とはまったく関係のない筆致は、絵画の自立性の表れである。自立性と痕跡性によって、絵画は「近代絵画」として新しい段階へと入っていった。

（菅香子『共同体のかたち』より。文章を一部改変した）

【注】 *印象主義 十九世紀後半のフランスに起きた絵画運動。ものから受けた感覚的主観的印象をそのまま作品に表現

しようという芸術上の主張をもつ。

問一 傍線部ア、エのカタカナを漢字に直し、解答欄に記せ。

問二 傍線部①「当時の人々はこの作品を見て戸惑いを覚えた」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア それまでの伝統的絵画の技法を無視した《笛を吹く少年》という作品の拙劣さに困惑していた。

イ 果敢に「歴史画」の伝統に挑戦した《笛を吹く少年》という作品のもつ迫力のままで圧倒されていた。

ウ 西洋絵画の伝統をないがしろにした《笛を吹く少年》という作品をどう評価してよいかわからなくなっていた。

エ 《笛を吹く少年》という作品の、それまでの西洋絵画には決してなかった美しさのままで言葉を失っていた。

オ 西洋絵画の伝統をくつがえした《笛を吹く少年》という作品のあまりにも進歩的な画風に感動していた。

問三 傍線部②「絵画が独自の表象空間だということ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 現実の歴史や宗教的物語とは異なる世界が描かれているということ。

イ 描かれた場面や世界が現実であるかのように感じさせるとのこと。

ウ 絵の具の重なりすぎない三次元的な物質的表象であるということ。

エ 見る者に現実には存在しない超常的世界を開示しているということ。

オ 現実をイリュージョン化して見る者を理想の世界に導くということ。

問四 傍線部③「神話や聖書や歴史の物語を参照する絵画であること」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 宗教的あるいは歴史の出来事を主題として描いても、常に現実中存在する風景・人物を想起させる絵画であること。
- イ たとえ人間の歴史を描いても神の存在が前提とされ、見る人を神聖な世界にいざなう絵画であること。
- ウ 神話が「歴史Ⅱ物語」に置き換えられる過程のなかで、宗教的な物語の一部として描かれる絵画であること。
- エ 集団的な記憶や夢想に属し、美の理想的な造型、および欲望の理想的な対象化を否定する絵画であること。
- オ 宗教的な物語や歴史的な出来事を主題とした、理想的だが非現実的な光景が描かれている絵画であること。

問五 傍線部④「寓意図」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 詩の主題に対して敬意を捧げているもの。
- イ 詩の精神を正確に絵画で表象しているもの。
- ウ 詩の観念を具象的に絵画で暗示したものの。
- エ 詩の技法を巧みに絵画に応用しているもの。
- オ 詩の構造を絵画の構図に利用しているもの。

問六 本文の内容と合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア マネ以前の伝統的絵画では、主に神話や聖書の物語、あるいは歴史的出来事を主題として描いてきたため、同時代のふつうの人々を描くことはなかった。

イ ミシエル・フーコーは『マネの絵画』において、伝統的絵画は画家が壁やキャンバスの上に描いたものであることを忘れさせ、画家の描いている空間それ自体を否定していた、と論じている。

ウ マネの『オランピア』や『草上の昼食』は、伝統的な絵画から構図やポーズを借用しているが、絵画の向こう側に現実感を持った生々しい空間が想定されている。

エ ガエタン・ピコンは『近代絵画の誕生』において、十九世紀前半でも絵画は依然として伝統を守っていたが、歴史的場面の中に「国民」を描き始めるなど近代化の一步を踏み出していた、と論じている。

オ 『バルコニー』や『田園の奏楽』といった絵画は、過去の絵画や詩を利用して描かれているが、そこにあった物語は抜き取られ、自立した世界が獲得されている。

問七 傍線部⑤「絵画の痕跡性」とあるが、それはどのようなものか。二十字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

A
達人の、人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。

たとへば、ある人の、世に虚言をかまへ出だして、人をはかるとあらんに、すなほにまことと思ひて、言ふままにはからる人あり。余りに深く信を起して、なほ煩はしく虚言を心得添ふる人あり。また、何ともしも思はで、心をつけぬ人あり。また、いささかおぼつかなく覚えて、頼むにもあらず、頼まずもあらず、案じめたる人あり。また、まことしくは覚えねども、「人のいふことなれば、さもあらん」とてやみぬる人もあり。また、さまざまに推し、心得たるよしして、かしこげにうちうなづき、ほほ笑みてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。また、推し出だして、「あはれ、さるめり」と思ひながら、なほ誤りもこそあれと怪しむ人あり。また、「ことなるやうもなかりけり」と、手を打ちて笑ふ人あり。また、心得たれども、知れりとも言はず、おぼつかかなからぬはとかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。また、この虚言の本意を、初めより心得て、少しもあざむかず、かまへ出だしたる人と同じ心になりて、力をあはする人あり。

愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得たる所、詞にても顔にても、隠れなく知られぬべし。まして、明らかならん人の、惑へる我等を見んこと、掌の上の物を見んが如し。ただし、かやうのおしはかりにて、仏法までをなすらへ言ふべきにはあらず。

〔徒然草〕より

問一 傍線部①「はかる」②「つやつや」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「はかる」

ア 欺く

イ 調べる

ウ 測定する

エ 試す

オ 比較する

② 「つやつや」

ア あたかも

イ 意外にも

ウ いつまでも

エ おおよそ

オ 少しも

問二 波線部X「よし」Y「あはれ」Z「ただし」の品詞として適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア 名詞

イ 動詞

ウ 形容詞

エ 形容動詞

オ 連体詞

カ 副詞

キ 接続詞

ク 感動詞

ケ 助詞

コ 助動詞

問三 二重傍線部1「り」2「ず」3「れ」4「ん」の活用形として適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。同じ記号をくり返し選んでもかまわない。

ア 未然形

イ 連用形

ウ 終止形

エ 連体形

オ 已然形

カ 命令形

問四 傍線部A「達人」と同じ意味で用いられている本文中の表現をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 煩はしく虚言を心得添ふる人

イ 手を打ちて笑ふ人

ウ 力をあはする人

エ 知りたる人

オ 明らかならん人

問五 傍線部B「何としも思はで、心をつけぬ人」を二十字以内で現代語訳し、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問六 傍線部C「頼むにもあらず、頼まずもあらず、案じゐたる人」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 信用するでもなく、しないでもなく、考え込んでいる人

イ 質問するでもなく、しないでもなく、心配している人

ウ 依頼するでもなく、しないでもなく、黙っている人

エ 勧誘するでもなく、しないでもなく、疑っている人

オ 一任するでもなく、しないでもなく、困惑している人

問七 本文全体で述べられた「虚言」の受け取り方の種類として適切な数をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 四種類

イ 六種類

ウ 八種類

エ 十種類

オ 十二種類

